

## ダニエル書 - 第36番

ネブカドネザルの預言的象徴：ミラー派運動の歴史的な道標とウライ川の封印された幻を解き明かす

Jeff Pippenger

2023-12-31

ダニエル書1章は、1840年8月11日から1844年10月22日までの、第一の天使と第二の天使の歴史を表している。ダニエル書4章もまた、紀元前723年から1844年10月22日までの第一の天使と第二の天使の歴史を扱っている。もちろん、これは「line upon line」という後の雨の方法論なしには見て取ることはできない。

第四章に描かれているネブカドネツアルは、非常に複雑な預言的象徴である。ウィリアム・ミラーの歴史におけるウライ川の幻の封印の解明について考え始めるにあたり、彼が何を表すのかを思い起こすことが重要である。ネブカドネツアルの第二の夢は、ウィリアム・ミラーの第二の夢と同様に、レビ記二十六章の「七つの時」を表しており、これはダニエル書全体を一つに織り上げる預言の糸となっている。ダニエルが第四章のネブカドネツアルの夢を解き明かしたとき、彼は来たる裁きを警告し、そのことによって、1798年の「終わりの時」に歴史に到来した第一の天使のメッセージを予表した。

ネブカドネザルに来るべきものとして警告されていた裁きが実際に到来したとき、その到来は、調査審判が始まった1844年10月22日を象徴していた。ダニエル書四章では、ダニエルによって与えられた警告のメッセージも、その警告に結びつく裁きの到来も、ともに「時」という語で表されている。ネブカドネザルの裁きの「時」は、第一の天使のメッセージにおける神の裁きの「時」を表していた。また、それは、神の執行審判が始まる日曜法の「時」も象徴していた。ダニエル書四章のうち、「時」という語で象徴されている1798年の第一の天使のメッセージの到来と、1844年10月22日の第三の天使の到来を表す部分は、その後、反復され、拡大される。「反復と拡大」の技法は、預言に繰り返し現れる預言的手法であり、とりわけダニエル書に顕著である。

ネブカドネザルが裁きの「時」に至ると、その彼への裁きである「七つの時」が始まり、彼は「北の王」として、紀元前723年にイスラエルの北王国にもたらされた裁きを表した。彼には獣の心が与えられ、聖書の預言において獣とは王国を意味する。紀元前723年から1798年に至るまで、彼はダニエル書でしばしば取り上げられる二つの異教の形態を代表した。

千二百六十日間、すなわち千二百六十年を象徴して、彼は異教の荒廃させる力を体現した。そしてさらに別の千二百六十日間、すなわち千二百六十年を象徴して、彼は教皇主義の荒廃させる力を体現した。両者の荒廃させる力の本質は同じであった。なぜなら、教皇主義とは単にキリスト教という名をまとった異教にすぎないからである。

「日々の終わり」とはダニエル書十二章で示され、1798年の「終わりの時」を表す象徴であるが、そのとき彼の王国は彼に回復された。ダニエル書四章の証言と『預言の霊』は、彼の王国が「日々の終わり」に回復されたとき、彼が回心した人であったことを示し

ている。こうして彼は、四つの重要な真理の預言的象徴となる。彼は、「七つの時」の前半に彼が象徴していた異教の竜の力と、後半に彼が象徴していた獣の力との間の預言的な連結となる。これら二つの力の象徴として、1798年に回復された王国として立つ彼は、続いて第三の荒らす力（偽預言者）を表す。それは、ツロの淫婦が忘れ去られている間、象徴的な七十年のあいだ支配することになっていた。バビロンの王として、ネブカドネザルは、終わりの時に現代のバビロンとなる三つの力の間の預言的な連結を表しており、それがやがて世界をハルマゲドンへと導く。

彼はまた、アメリカ合衆国の誕生を地の獣として表し、それは1798年に小羊として始まり、彼の回心の経験によって象徴された。彼は同時に、その地の獣の二本の角も表し、その角は共和主義とプロテスタンティズムとして合衆国の力を示しており、それこそが同国を世界で最も恵まれた国とならしめた。ところが、象徴的な七十年の終わりには、その二本の角は背教的共和主義と背教的プロテスタンティズムとして表され、両方の角は二つの階級に分けられることになる。共和主義の角は、憲法の神聖な原則を公然と無視する民主党と、自らを憲法の擁護者・闘士だと称しながら、実際にはその神聖な原則を否定し、その聖なる文書に内在する原則に優先して伝統や慣習を選ぶ共和党とから成る。

その二つの陣営は、キリストの時代にはサドカイ人とパリサイ人によって象徴されていた。サドカイ人とパリサイ人の精神は、背教的プロテスタントの角にも現れるだろう。一方は日曜礼拝を支持し、他方は安息日礼拝を支持する。1798年の「日の終わり」におけるネブカドネザルの回心した状態は、アメリカ合衆国と、地の獣の二本の角の両方をよく表している。これら三つの象徴（地の獣とその二本の角）は、子羊から竜へと変わる運命にあった。

ネブカドネザルは、彼の「七つの時」の終わりに、彼の実際のバビロン王国が、終末の現代バビロン（竜と獣と偽預言者から成る）の象徴であることを示す鍵となるつながりを体現した。彼はまた、二本の角を持つ地からの獣によって表される三つの預言的存在をも体現した。その地からの獣は、ツロの淫婦が忘れ去られている象徴的な七十年の間に、子羊から竜へと変わる。彼の実際の王国こそが、象徴的な七十年のあいだ支配する王国を予表する王国そのものであるという事実は、きわめて深遠である。

第四章におけるネブカドネザルの象徴は、第一章に重ね合わせて適用されるべきである。その適用がなされると、ミラー派の歴史の道標が一つにまとめられ、当時封印が解かれたウライ川の幻に関するいくつかの真理が確証される。ミラー派運動の土台であり中心の柱は、ダニエル書第八章十三節と十四節の問答であった。問いはこうである。「常供のささげものと荒廃の背きに関するこの幻はどれほどの期間続き、聖所と軍勢がともに踏みじられるのはいつまでか。」

聖書に加えられた数百、いや数千の語のうち、本文に属しないと靈感が指摘しているのは、加えられた語「いけにえ」だけである。その語を適切に取り除けば、「日ごとのもの」と「背き」が二つの別個の荒らす力であることが明確になる。ホワイト姉妹は、「いけにえ」という語は人間の知恵によって付け加えられたものであり本文には当てはまらなると明確に指摘し、同じ箇所、「日ごとのもの」を異教と同定したミラー派の人々が正しかったことも示している。13節の問いの中にある文法上の語句は、キリストがホワイ

ト姉妹の著作を通して慎重に明らかにされており、テキストと付与された靈感による指示に従うなら、問いはこうなる。「聖所と神の民の双方を踏みこむことになっていた、異教と教皇主義という二つの荒らす力に関する幻は、いつまで続くのか。」

したがって、ネブカドネザルが1798年の「終わりの時」に位置づけられるとき、彼は回心した人を表しており、ゆえにアドベンティズムの中心的な柱と基礎を理解する「賢い者たち」を表している。彼の回心は、その時に封印が解かれた「知識の増加」を理解する「賢い者たち」を指し示しているが、彼自身の預言的象徴は、「神の民（軍勢）と神の聖所を踏みこむ異教と教皇制の荒廃の勢力に関する幻はどれほどの期間なのか」という問いの主題である歴史を直接示している。「知識の増加」を理解する「賢い乙女」の象徴として、彼はウィリアム・ミラーを表している。というのも、ミラーは、1798年の「終わりの時」に始まった歴史において「賢い者」であった人々の象徴だからである。

ネブカドネザルは「終わりの時」を示す道標の象徴であり、それを第一章に当てはめると、彼はまた、その時に第一の天使が到来したことも表している。というのも、第四章では、ダニエルがネブカドネザルに警告のメッセージを告げる「時」が第一の天使の到来を示しており、それは1798年であったからである。ネブカドネザルの象徴が第四章で生み出す道標は、紀元前723年、538年、1798年（「終わりの時」）、そして1844年10月22日である。

ダニエル書1章におけるミラー派の歴史の道標は、ヨヤキムから始まる。彼は、1798年の「終わりの時」に到来した第一のメッセージのカづけの象徴である。ヨヤキムに象徴される第一のメッセージのカづけは、1840年8月11日を指し示す。ヨヤキムの征服は、キュロスの勅令で終わるバビロンの支配七十年を開始する。ダニエル書1章は三段階の試験の過程を示しており、食事に関する試験に続いて視覚的な試験があり、最後はリトマス試験で締めくくられる。これら三つの試験は1840年8月11日を表している。この日、イエス・キリストご本人にほかならない力強い御使いが、神の民がそのとき「食べる」べき小さな巻物を携えて天から降りて来た。ちょうどダニエルと三人の勇士が、バビロンの食事ではなく野菜の食事を選んだのと同様に。

その過程の第二の試験は、プロテスタント諸教会がミラーのメッセージ（第一の天使のメッセージ）を拒絶したことの現れを示すものであり、その時点で、ミラー派運動と、背教的プロテスタントとしての預言的役割を開始したプロテスタント諸教会との間に区別が見られるようになった。これら二つの階級の区別は、バビロンの食事ではなく天の食物を食べたことによって、ダニエルと三人の若者の容貌がより美しく、肉つきが良く見えたのと同じくらい明確であった。その区別は、聖書暦1843年の終わり（1844年4月19日）に際して顕著になった。そのとき、十人の乙女のたとえの遅延の時到来した。

第三の試験、すなわち試金石となった試験は、1844年10月22日を表していた。三年ののちに「時」が来て、ネブカドネザル自身が、ダニエルと三人の勇士がバビロンの知者たちよりも「十倍」優れていると判定し宣言した時である。ダニエル書4章を1章に重ね合わせると、1798年の「終わりの時」に始まり、1840年8月11日の第一の天使のメッセージの強化、1844年4月19日の最初の失望、そして1844年10月22日の大失望へと至るミラー派の歴史の道標が示される。

ミラー派の歴史における具体的な道標を特定することにとどまらず、二つの章は、「行に行を重ねる」ように併せて読むと、第一の天使のメッセージを示し、二千三百日の基礎教理の主題である二つの荒廃させる勢力を特定し、また、ダニエル書が封印を解かれるときには常に起こるダニエル12章の三段階の試験の過程も明らかにしている。

彼らはまた、1798年における「賢い者」の象徴としてのネブカドネザルが、第4章に記された彼の第二の夢と相まって、やがて真のプロテスタントの角となる運動を起こしたウィリアム・ミラーを表していると認識している。アドベンチズムの基礎的真理を表すウィリアム・ミラーの働きはハバククのものに示されており、その聖なる二つの表の作成は神によって導かれた。

ミラーには、預言史的な彼の視点が、荒廃をもたらす勢力が三つあること—すなわち、異教（竜）と教皇制（獣）だけでなく、背教したプロテスタントイズム（偽預言者）—を認識することを妨げていたため、正しく理解できなかった預言的真理がいくつかあった。神の摂理により、歴史における彼の視点によって制限されていたミラーのそうした預言理解は、ハバククのものに示されなかった。

ダニエル書4章にあるネブカドネザルの第二の夢は、ウィリアム・ミラーの第二の夢を表している。両方の夢は「七つの時」に言及しており、ミラーの夢は、1863年に始まり真夜中の叫びに至るまで激化する、彼の働きへの拒絶を示している。どちらの夢も、散らしの期間の後に王国が回復されるところで終わる。このため、1798年に封印が解かれたウライ川の幻を直接検討する前に、まずミラーの第二の夢を考察する。

私は夢を見た。神が、見えない御手によって、黒檀製で真珠が巧みに象嵌された、長さは約十インチ、六インチ四方の精巧な小箱を私に送ってくださった。小箱には鍵が付けられていた。私はすぐにその鍵を取り、小箱を開けた。すると驚いたことに、あらゆる種類と大きさの宝石、ダイヤモンド、貴石、そしてあらゆる大きさと価値の金貨や銀貨が、小箱のそれぞれの場所に美しく並べられて、いっぱい詰まっていた。こうして並べられたそれらは、太陽にのみ比肩し得るほどの光と栄光を放っていた。

その中身の輝きと美しさ、そして価値に心は喜びで満たされたが、この素晴らしい光景を自分ひとりで楽しむわけにはいかないと思った。そこで私はそれを部屋の中央のテーブルに置き、望む者は誰でも来て、この世で人が見たうちで最も壮麗にして輝かしい光景を見られるよう知らせた。

人々が入って来はじめた。最初はわずかだったが、やがて群衆にふくらんだ。彼らが最初に宝石箱の中を覗き込むと、皆、感嘆し、歓喜の声を上げた。だが見物人が増えるにつれ、誰もが宝石をいじりはじめ、宝石箱から取り出しては机の上に散らかした。私は、持ち主がまた私に宝石箱と宝石の返還を求めてくるに違いない、と考えはじめた。もしそれらを散らかされるままにしてしまえば、以前のように宝石箱の中の元の場所に戻すことは二度とできないだろうし、その責任は計り知れず、とても果たせないと感じた。そこで私は、人々に、触らないでくれ、宝石箱から取り出さないでくれと懇願しはじめた。だが私が懇願すればするほど、彼らはますます散らかし、今や部屋じゅう、床や部屋のあらゆる家具の上にまでばらまいている有様だった。

そのとき私は、彼らが本物の宝石や貨幣の中に、無数の偽物の宝石と偽造貨幣を紛れ込ませてばらまいているのを見た。私は彼らの卑劣な振る舞いと恩知らずぶりにひどく憤慨し、そのことを戒めて非難した。だが、私が戒めれば戒めるほど、彼らは本物の中に偽物の宝石と偽造貨幣をますますばらまいた。

そこで私は肉体の魂にかき乱され、腕力に訴えて彼らを部屋の外へ押し出し始めた。だが一人を押し出しているそばから、さらに三人が入ってきて、土や削りくずや砂や、あらゆる種類のがらくたを持ち込み、本物の宝石やダイヤモンドや硬貨を残らず覆い隠し、すべてが見えなくなるまで続いた。彼らはまた私の小箱を引き裂いて粉々にし、その破片をがらくたの中にまき散らした。私の悲しみや怒りを顧みる者は誰もいないのだと思った。私はすっかり気力を失い、落胆して、腰を下ろして泣いた。

このように大きな喪失と自らの責任の重さを思って泣き嘆いていると、私は神を思い起こし、助けを送ってくださるよう切に祈った。するとすぐに戸が開き、一人の男が部屋に入ってくると、そこにいた人々は皆出て行った。彼は手にほうきを持ち、窓を開け、部屋から塵やごみを掃き出し始めた。

彼にやめてくれと叫んだ。というのも、がらくたの中に貴重な宝石がいくつか散らばっていたからだ。

彼は私に「恐れるな。私が彼らの世話をするから」と言った。

すると、彼が塵やごみ、偽物の宝石や贋金を掃き払っているうちに、それらは皆、雲のように舞い上がって窓から外へ出ていき、風に運ばれていった。その騒ぎのさなか、私はほんの一瞬目を閉じた。目を開けると、ごみはすっかりなくなっていた。貴重な宝石やダイヤモンド、金貨や銀貨が、部屋じゅうに溢れるほど散らばっていた。

彼はそれから、前のものよりはるかに大きくていっそう美しい小箱をテーブルの上に置き、宝石、ダイヤモンド、硬貨を一握りずつかき集めてはその小箱に投げ入れ、いくつかのダイヤは針の先ほどの大きさしかなかったにもかかわらず、一つも残らなくなるまで続けた。

そして彼は私に「来て見なさい」と呼びかけた。

私は小箱の中を覗き込んだが、その光景に目がくらんだ。それらは以前の栄光の十倍の輝きで光っていた。私は、それらが、塵の中にそれらをまき散らし踏みにじったあの邪悪な者たちの足によって、砂の中で擦り減らされてしまったのだと思っていた。ところがそれらは小箱の中に美しく整然と並べられ、それぞれがあるべき場所にあり、投げ入れた者が目に見えて苦労した形跡もなかった。私は喜びのあまり叫び声をあげ、その叫びで目が覚めた。Early Writings, 81-83.

次の記事でミラーの夢を取り上げます。

以下は、James White が the Advent Herald に Miller の夢を掲載した際に記した、William Miller の第二の夢の序文です。

次の夢は二年以上前に『アドベント・ヘラルド』に掲載された。そのとき私は、それが私たちの過去の再臨に関する経験を明確に指し示しており、散らされた群れの益の

ために神がこの夢をお与えになったのだと悟った。

主の大いなる恐るべき日が近づいていることを示すしるしの中に、神は夢を定められた。ヨエル書2:28-31、使徒行伝2:17-20参照。夢は三つの仕方である。第一に、「多くの務めによって」。伝道者の書5:3参照。第二に、サタンの汚れた霊と欺きのもとにある者たちは、彼の影響によって夢を見ることがある。申命記8:1-5、エレミヤ書23:25-28、27:9、29:8、ゼカリヤ書10:2、ユダの手紙8節参照。第三に、神はこれまでも今も、天使と聖霊の働きを通して与えられる夢によって、多かれ少なかれご自身の民を教えておられる。真理の明るい光の中に立つ者は、神が自分に夢をお与えになるときそれを悟るであろう。そのような者は、偽りの夢によって欺かれ、迷わされることはない。

「そして彼は言った、『今、わたしの言葉を聞け。もしあなたがたのうちに預言者がいるなら、わたし、主は、幻のうちに彼に自分を知らせ、夢において彼に語る。』民数記 12:6。ヤコブは言った、『主の使いが夢の中で私に語った。』創世記 31:2。『そして神は夜、夢の中でアラム人ラバンのもとに来られた。』創世記 31:24。ヨセフの夢、[創世記 37:5-9]、そしてそれらがエジプトで成就した興味深い物語を読みなさい。『ギベオンで、主は夜、夢の中でソロモンに現れた。』列王記上 3:5。ダニエル書2章の重要な大いなる像は夢において与えられ、7章の四つの獣なども同様である。ヘロデが幼子の救い主を滅ぼそうとしたとき、ヨセフは夢でエジプトへ逃げるように警告を受けた。マタイによる福音書 2:13。」

「そして、神は言われる。『終わりの日に、わたしはわたしの霊をすべての人に注ぐ。あなたがたの息子たちと娘たちは預言し、あなたがたの若者たちは幻を見、あなたがたの老人たちは夢を見る。』使徒行伝 2:17」

夢と幻による預言の賜物は、ここでは聖霊の実であり、終わりの日には、しるしとなるに足るほどに現されるであろう。それは福音の教会に与えられた賜物の一つである。

「そして、彼は、ある者を使徒に、またある者を預言者に、またある者を伝道者に、またある者を牧師および教師としてお与えになった。これは、聖徒たちを整え、奉仕の働きのために、キリストのからだを建て上げるためである。」エペソ人への手紙 4:11-12

「そして神は、教会の中に、第一に使徒、次に預言者を置かれた。」など。第一コリント 12:28。「預言を軽んじてはならない。」第一テサロニケ 5:20。使徒の働き 13:1、21:9、ローマ 7:6、第一コリント 14:1、24、39 も参照。預言者、あるいは預言は、キリストの教会を建て上げるためのものであり、伝道者・牧師・教師がやむ前にそれらがやむべきだと神の言葉から示せる証拠は何一つない。ところが反対者は言う、「偽りの幻や夢があまりにも多かったので、その類のものは何も信用できない。」確かに、サタンにはその偽物がある。彼には常に偽預言者がいたし、ましてや今や、彼の欺きと勝利のこの最後の時においてはなおさらそれを予期して当然である。偽物があるという理由でこの種の特別な啓示を退ける者は、一歩進んで、神が夢や幻によって人にご自身を啓示されたことはかつてなかったと否定しても同じ理屈になる。というのも、偽物は常に存在してきたからである。

夢と幻は、神がご自身を人に啓示してこられた手段である。この手段によって神は預言者たちに語られ、福音の教会における諸賜物の中に預言の賜物を据えられ、さらに、夢と幻を『終わりの日々』のほかのしるしと同列に位置づけておられる。アーメン。

「上記の所見における私の目的は、聖書に即した方法で異議を解消し、以下に続く内容に備えて読者の心を整えることであった。」ジェームズ・ホワイト。